岡大医短紀要，8：43～48，1997
Bull Sch Health Sci, Okayama Univ
（原　著）

進路指導を行う高校教師の看護職についての認識

太田武夫　下石靖昭　景山甚郷　渋谷光一　唐下博子　遠藤　浩

要　　約

1993年に岡山県で行った先の研究で，高校生の看護課程の選択にあたって，進路指導を行っている教師の役割が大きい事を報告した。

今回は3年経った1996年に，同じ郵送調査を岡山県および周辺10県の普通科高校617校より無作為に選んだ127校において実施した。

64校より得られた回答を要約すると以下の通りであった。

1．教師が挙げた看護婦不足の理由はまず「勤務時間が厳しい（85.9%）」，「仕事の内容が厳しい（53.1%）」といった仕事のきつさで，次いで「仕事の割には社会的評価が低い（32.8%）」であった。

2．教師が学生に肯定的イメージとして看護課程を勧める理由は，「まず専門職であること（73.4%）」，次いで「人に貢献できる喜び（53.1%）」であった。

これらの結果は前回の結果と比較して統計的な有意差は認めなかった。

3．近年進められている3年制看護課程（準学士課程）から4年制課程（学士課程）への移行に関して，教師はこれらは学生の関心を呼ぶとし(79.8%)，看護課程へ進学する者は増加するであろうとしている（57.8%）。またこれまでよりこの課程への進学を教師は勧め易くなるとしている（56.3%）。

これらの率は前回の結果と比較すると統計的に有意に高かった。

キーワード：看護課程，看護，看護婦，高校教師，進路指導

は　じ　め　に

近年大学教育による看護職養成が重視されるようになったが，その背景として，保健・医療・福祉の社会的ニーズの高まりと発展，少子化にともなう学生人口の変化，高い質の看護実践能力の必要性，看護学および看護の専門性の発展などが挙げられている。そして看護教育の理念および目的としては，医療専門職の一員として他の関連従事者と相補的に連携をとりながら，対象者の自立と自己実現を援助できる高い資質をもつ人材を育てることが求められている[1,2]。このような社会的要請の中で，全国的に従来大多数をしめてきた3年制の看護課程から4年制化への移行が次々に進められてきた。本短期大学部でもこれまで将来の移行と新しい看護課程の構築に向けて，種々の改革，討議および調査を行ってきた[3-8]。

このうち1993年に行った岡山県下の高校進路指導教師に対する看護課程および看護職についての調査[7]には，76校中33より回答が得られた。この結果では，4年制への移行は高校生の関心を呼ぶとするものが51.5%，受験者が増加するとするものが36.4%，そして進路として勧めやすいとするものが36.4%という結果を得たが，「変わらない」，「分からない」とするものも多かった。また看護婦不足の理由や看護課程を勧める場合の理由を問う質問に対する回答は，生徒における調査結果と比較して看護観に違いが見られることを認めた。これらの結果は，今後，高い資質を有する看護課

岡山大学医療技術短期大学部

程志望者を得るには，高校教師への看護に関する十分な情報提供も重要であるのではないかと考えさせるものであった。

その後，全国的に地域医療計画が急速に整備・充実されてきて，4年制看護課程の新規開設や看護要員の充足も進められてきている今日，高校教師の看護観を再評価することは今後の看護教育の視点形成に資するのではないかと以下の研究を行った。

研究方法

1．調査対象校および対象者

調査対象校は全国学校総覧[9]をもとに，中国地方5県，四国地方4県，近畿地方で隣接する兵庫県の計10県の普通科を有する高校617校より5分の1の系統的無作為抽出で選んだ127校である。これらの高校で進学。進路指導をしている教師に回答を依頼した。

2．調査方法

調査は自記式のアンケート調査で，1996年7月10日より9月10日までの期間に郵送法によって行

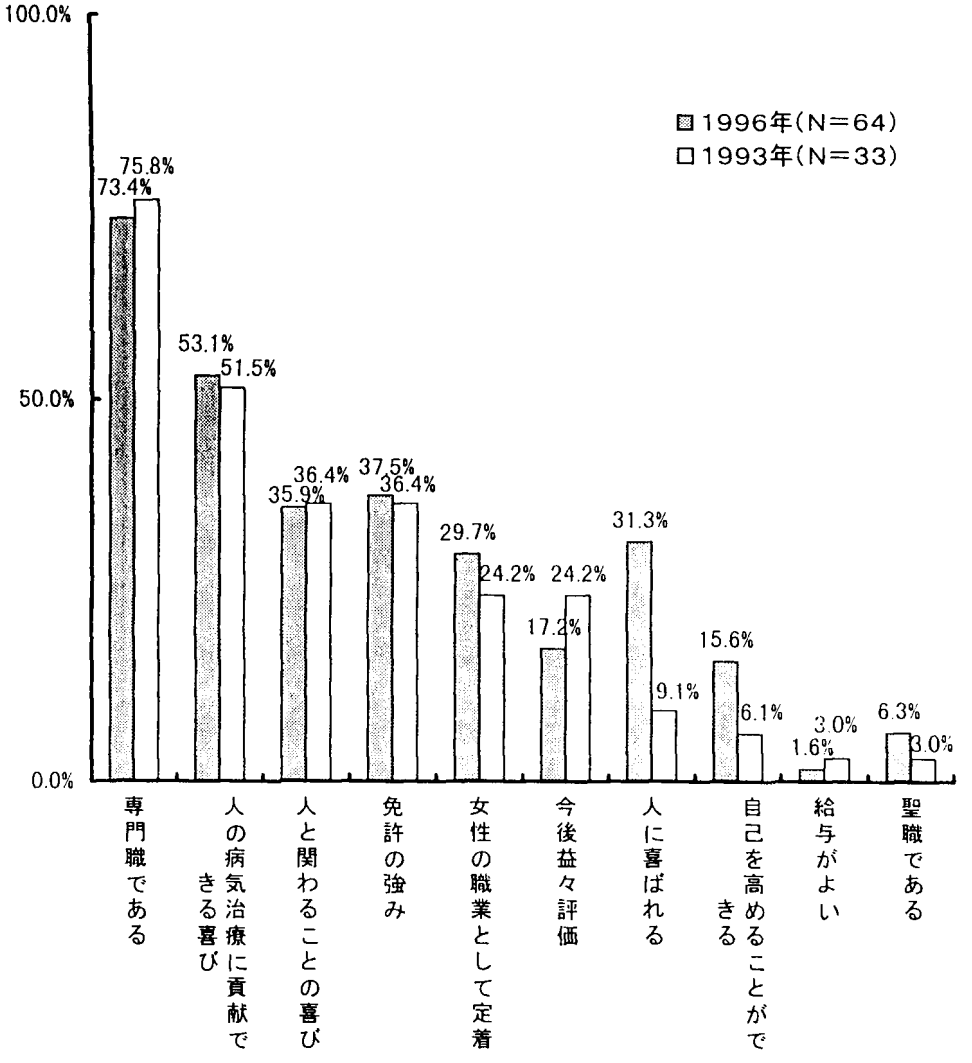

図1　高校の教師が考える看護婦不足の理由

った。調査内容は前回岡山県下で行った調査のと同じもので，1）看護婦不足の理由，2）進路としての看護課程を進める理由，3）4年制看護課程に対する見通しに関するものである。設問項目および回答の選択肢は全く同じものである。

データの分析には統計パッケージHALBAU（現代数学社）を用いた。比率の比較はカイ2乗検定によったが，少数の頻度の場合はフィッシャーの直接確率計算法によった。

結　　果

回答を得られたのは回答を依頼した127校中64校で，回収率は50.4％であった。うち公立高校は51校，私立高校は13校であった。この対象校には生徒に対する調査も同時に依頼し，その52校における結果は別報にまとめたが，本報の調査にのみ回答している高校があるためやや回答数がそれを上回っている。

1．高校教師の考える看護婦不足の理由

10項目の回答肢にたいする多項選択によって挙げられた回答数を，頻度の高い順に1993年の調査

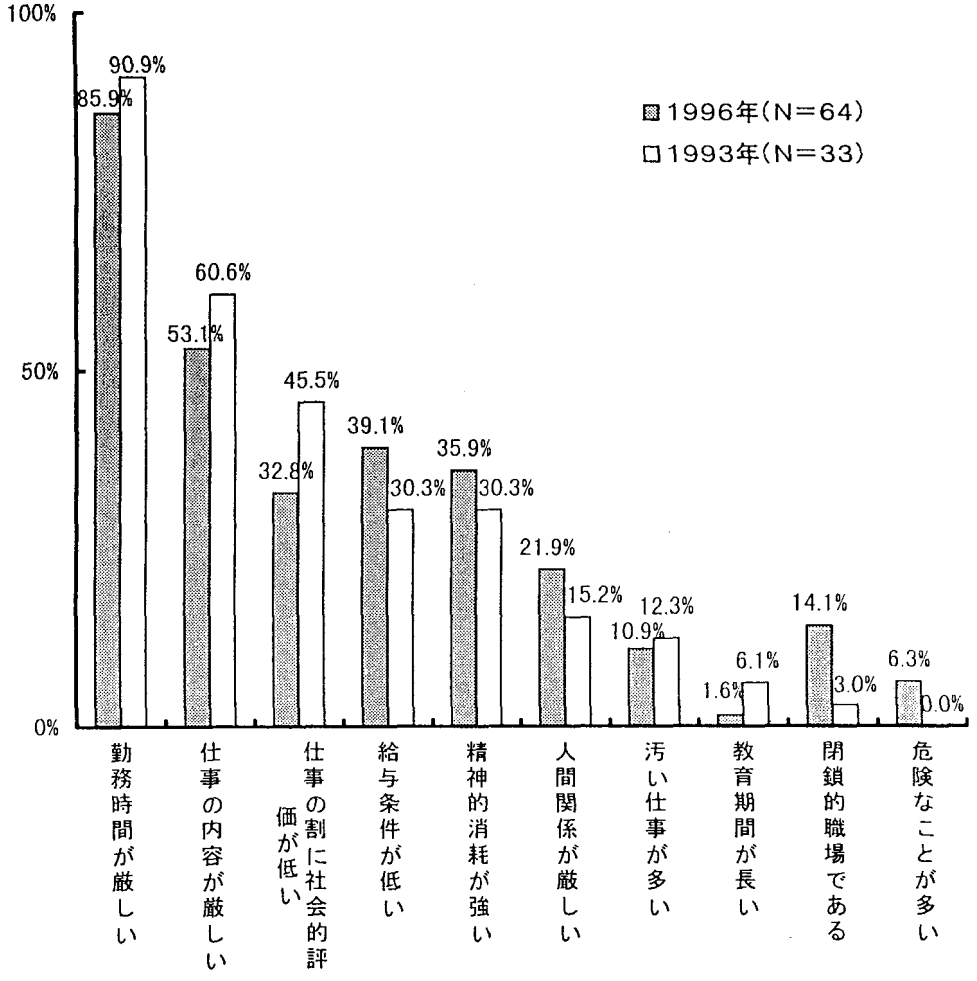

図2　高校の教師が学生に看護課程を勧める場合の理由

結果と対比させたものが図１で，ほぼ同じ傾向が認められる。前回同様仕事のきつさとその割に社会的評価の低いことが上位に挙げられている。

調査対象に違いがあるので，安易な比較は危険であるが，前回の結果とカイ２乗検定で比較しても有意の差は認められなかった。

２．教師が学生に看護課程を勧める場合の理由

図２に示した如く，一定の資格に裏付けられた専門職であることと，人と人の病気に関わり貢献できるという４項目が上位に挙げられている。前回との比較でみると「人に喜ばれる」という項目で今回は１％以下の危険率で高くなっているのが特徴的である。

３．４年制看護課程を志望する学生の動向に関する教師の意見

表１　進学希望者の４年制大学看護学科に対する関心

調査年	1996	1993
合　計	64	33
関心を呼ぶ	51(79.7)	17(51.5)
変わらない	9(14.1)	8(24.2)
分からない	4(6.3)	8(24.2)

（　）内は％

表１に示すように，４年生看護学科は学生の関心を呼ぶとする回答は前回の回答に比し79.7％と顕著に増加しており，両者間に１％以下の危険率で有意の差が認められた。また受験者数も，表２に示すように増加するとする回答が増加しており，５％以下の危険率で有意の差が認められる。

表２　４年制大学看護学科増設に伴う看護系受験者数の増加

調査年	1996	1993
合　計	64	33
増える	37(57.8)	12(36.4)
変わらない	13(20.3)	12(36.4)
分からない	14(21.9)	9(27.3)

（　）内は％

今回の対象を普通科を有する高校に限ったことにもよろうが，広域での調査結果として，４年制看護課程が高校から素質のある学生を求め得る可能性を示しており，注目できる。

表３　進路としての４年制大学看護学科の勧めやすさ

調査年	1996	1993
合　計	64	33
勧めやすい	36(56.3)	12(36.4)
変わらない	22(34.4)	9(27.3)
分からない	6(9.4)	1(3.0)

（　）内は％

また表３に示す如く，教師自身が進路として勧めやすいと答える率も増加しており，前回に比して１％以下の危険率で有意の差を認めた。

４．公立高校と私立高校の教師による意見の違い

上記１～３のついて公立高校と私立高校別の教師の意見に相違があるかどうかを比較検討した結果では，いずれの項目についても有意の差は認められなかった。

考　　察

看護教育の改革に早くから着手した米国では，早い時期から病院を基盤にした看護婦養成から大学教育による教育に切り替え，1978年には既に教育施設の４分の３が短大もしくは大学になっており，現在の我が国の状況をも上回っていた[10]。それにもかかわらず西暦2000年においても大学の看護課程を卒業する看護婦数は需要を下回り，しかも高校生数の減少傾向と新しい女性の職業の広がりから，素質のある学生を看護界に如何に呼び込むかという問題が懸案となっている。Lippman[11]らはこの点について，一般の人々は専らマスメディアによって与えられるステレオタイプな看護婦像によって，看護の否定的なイメージを与えられているとし，高校生の進路指導にあたるカウンセラーの看護観を重視する必要があると述べている。

著者らの調査の意図も，高校の進路指導教師に十分な情報提供が重要であるという前報[9]の結果の通り，基本的にこれと同じ観点に立っている。今回の調査結果は総じて前回に比べてより４年制看護課程に対する期待が高いこと，教師としても進路として勧めやすい結果を認めたが，今回の調査がより広域の調査であり，回収数も多いことからより意義のある結果ではないかと考える。また，この間に急速に増加してきた４年制看護課程の増

加による，看護教育に対する理解の変化とも理解でき，将来のこの分野への人材確保に好ましい情報である。

しかし進路指導教師の看護観については前回に比べて殆ど差がないことを考えあわせると，人生の進路としての看護職に対する意義づけが好転したというよりは，3年制よりは4年制，専修学校よりは大学での教育といったことに認められる利点を評価しているのではないかと思われる。唯一有意差を認めて今回高率であった「人に喜ばれる」という献身的な看護婦像が，これまでよりも生徒に進路として「勧めやすい」ということと相まって，生徒の将来を考える立場にある教師として表現しやすくさせているのであろうと考えられる。

米国の進路指導カウンセラーの看護観の調査[11]では看護の自立性，専門学校教育と大学教育の違い，看護教育を受けるための知性（brain）の必要性が明確に示されており，1990年の時点ではメディアによる否定的な影響を受けていないとされている。我が国でも3K（危険，きつい，汚い）あるいは6Kといわれる否定的な面が社会的にとりあげられてきたが[12]，今回の調査でも「勤務時間が厳しい」，「仕事の内容が厳しい」という『きつさ』と関連する項目が看護婦不足の理由として高率に挙げられるように，教師から見れば看護業務にはまだまだ否定的な側面が強いことが伺われる。また勧める理由を肯定的な側面と考えれば，「人の病気治療に貢献できる喜び」，「人と関わることの喜び」といった献身的な面や主観的な満足感では高い率を示すが，専門職であるとしながらも，「今後益々評価される」，「自己を高めることができる」，「給与がよい」といった客観的評価と関わる面での評価が低い点が特徴的である。おそらくこれは両国の看護の歴史と実状の違いによるものであろうが，我が国の高校の進路指導担当教師の積極的な看護課程への勧めを得るにはまだまだ隘路が残されているといえよう。

Lippman[11]らは，また，看護界によき人材を得るために，看護職にあるものが，教師や生徒，それに生徒の両親とよく接触し，情報を提供することが必要であると述べており，この点はこれまで本学の調査で指摘している事と一致し，その努力は看護界にあるものの責務であるといえよう。

さらに前報でも指摘した如く，教師の考える看護職の社会的評価の低さを変える改革もまた，同時に重要であろう。

ま　と　め

岡山および近隣9県の普通科高校進路指導教師64人の郵送法による調査で，教師の看護業務に対するイメージは前報における結果と変化はないが，4年制看護課程への期待はさらに高まっていることを認めた。このような高校教師や生徒の期待の変化を通して，看護の社会的評価の重要性を指摘した。

文　　献

1）大学基準協会看護学教育研究委員会：21世紀の看護学教育―基準の設定に向けて―．1-12，1994.

2）厚生省健康政策局看護課：看護教育カリキュラム―21世紀に期待される看護職者のために―．6-9，第一法規，東京，1988.

3）岡山大学医療技術短期大学部：自己点検・評価報告書―現状と課題．1994.

4）岡山大学医療技術短期大学部：自己点検・評価報告書―平成6年10月以降の改善と新たな課題．1996.

5）荒川靖子，小野ツルコ，小原ルリ子，伊東久恵，喜多嶋康一：岡大看護学科への進路決定に影響する要員の研究．岡大医短紀要2：97-104，1991.

6）前田真紀子，高畑晴美，近藤益子，太田武夫，喜多嶋康一：看護課程志望高校生の看護職に対するイメージに関する研究．岡大医短紀要5：37-45，1997.

7）高畑晴美，前田真紀子，太田武夫，喜多嶋康一，近藤益子：進路指導を行う高校教師がもつ今後の看護課程についての認識．岡大医短紀要5：47-52，1997.

8）太田武夫，下石靖昭，景山甚郷，渋谷光一，唐下博子，遠藤　浩：医療技術教育に対する高校生の認識と関心に関する研究．岡大医短紀要7(2)：113-119，1996.

9）文部省大臣官房調査統計企画課（編）：全国学校総覧．原書房，東京．1994.

10) Roemer R : An introduction to the U.S. health care sysytem, Springer Publishing Company, New York. 47-55, 1982.

11) Lippman DT and Ponton KS : The image of nursing among high school guidance counselors, Nursing Outlook 41 : 129-134, 1993.

12) 行天良雄：看護婦が足りない．岩波ブックレット，岩波書店，東京．180，1991.

Views concerning nursing and nursing course of senior high school guidance teachers

Takeo OHTA, Yasuaki SHIMOISHI, Jingo KAGEYAMA,
Koichi SHIBUYA, Hiroko TOHGE and Hiroshi ENDO

Abstract

A previous study in Okayama prefecture in 1993 indicated the importance of high school teachers' influential rule on student's choice of nursing course.

The same questionnaire survey was sent out by mail in 1996 to guidance teachers of 127 general high schools randomly selected from 617 schools in 10 prefectures, in and around Okayama.

Data obtained from 64 teachers were analyzed and the results were as follows;

1. They suggested that shortage of nursing manpower was due to the harsh working conditions such as long and irregular hours(85.9%) and hard work(53.1%), and also the low social esteem of nurse(32.8%).
2. The aspect of nursing noted by teachers were job specialty(73.4%) and devotion to people(53.1%). There were no statistical difference between these results and those of the previous study.
3. The teachers answered that the new four-year nuersing course (baccalaureate) currently being promoted from over the the present three-year course(associate degree) would be an incentive to students(79.8%) and might increase the number of students choosing to study nursing(57.8%). And they also noted that they would more readily recommend this course to students than before. These rates were significantly increased compared to the results of the previous report.

Key words: nursing course, nursing, high school teacher, high school student

School of Health Sciences, Okayama University